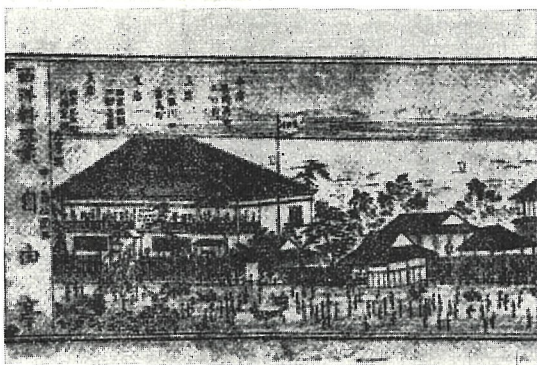




自由亭 先生は、募金運動のため、たびたび
ここも利用された。

同志社

歴史散歩

大阪(2)

鎚木路易

志士ハ勞ヲ厭ハス 富人ハ財ヲ吝マス
精神一到必ス之ヲ成シテ後己マンノミ

同志社大学校設立旨趣

1 自由亭

たばこ入よどやばしなりりよりちや屋
とらやまんじゅうしばいこめいち」

これは、大阪の名物覚え歌の一節である。
まことに、大阪の街筋に並ぶ料理飲食店の数
は多い。しかし、高級料亭・旅館となると、
古来、その数が意外に少なかった。明治36年
第五回内国博覧会が中之島で開かれた際、外
人客の宿舎として、各国大公使を大阪クラ
ブホテルに収容するのがやっと、という状態
であった。これとて、明治32年にできたばかり
で、それまでは、自由亭という西洋料理店
であった。これが大阪ホテルの前身で、大正
13年の失火の時まで、中之島・中央公会堂の
東北岸に建っていたのである。

それで、こうした当時的高级料亭・旅館を
背景にして、これから、その後の新島先生の
大阪における活動(大学設立運動)の跡を散

歩して見るのも、また面白いと思うのであ
る。

2 銀水楼・静観楼

嘆き玉うな板垣は死すとも自由は亡びま
せぬぞ」(小室信介「朝日新聞」)

板垣遭難(明治15年4月6日)の、この詳
報が「朝日」に載ったのが11日。同じ日、先
生は神戸で事件を知った。急ぎ京都に帰る
と、17日ひとまず大津に迎え、21日あらため
て大阪に赴き、今橋一丁目真島方に療養中の
板垣を見舞った。この間の事情は、先生の日
記に詳しい。

板垣が大阪で療養したのは、この地が、愛
国社以来自由民権運動のメッカであったから
である。明治14年10月、東京に自由党が生れ
ると、その別動隊として、大阪には「立憲政
党」が組織された。中島信行・古沢滋・沢田
正修・菊池侃二らがその重鎮で、近在を遊説
に出ることもあった。そして、大和で発掘し
たのが土倉庄三郎である。吉野郡大滝村の豪
農で、その出資金三万円をもって、古沢が主
筆をしていた「大坂日報」を買収し、機関紙

として「立憲政党新聞」を発行した。これが、その後の変遷を経て今日の「毎日新聞」となるのである。

この古沢と土倉が、明治14年も終わろうという時、先生を訪ねて来た。土倉が、その二子の教育を同志社に托するためである。さて、その面談中、話がたまたま大学の事に移ると、古沢はその必要を説き、土倉はその資金の協力を約束した。

こうした経緯があったから、遭難の報を知って、先生は板垣を見舞ったのであろう。

その後、先生は足繁く大阪の地に、古沢と土倉を訪ね、時には、土倉の本処、大和の奥地まで草鞋を穿くこともままあった。古沢の立籠る「立憲政党新聞」は、今橋二丁目天王寺屋の旧邸にあり、土倉の大阪の定宿は銀水楼であった。

銀水楼は、自由亭と同じく、中央公会堂の北岸にあり、純日本料理の高級料亭で、旅館をも兼ねていた。(明治の中頃、廃絶)

明治16年、大学設立への第一歩をふみ出す。すなわち、設立の「始末」・「旨趣」発表。明治17年、大学設立発起人会成立。まず、明治専門学校設立。静養と、外資獲得のため

先生外遊の途につく。かくて、4月5日、静観楼で、大阪市内四教会合同の先生の送別会が開かれることとなる。

静観楼は、料理より、大阪ステーションと陸蒸気が見られる、というので評判の料亭で、戦災をうけるまで今の産経会館の地にあった。

3 西洋楼・灘萬

創業来諸彦の愛顧を蒙り日に栄を加え欣喜に不堪今後更に価を改め 一等七十銭 上等五十銭：」 大阪常安橋北詰八百富事 西洋御料理 西洋楼(明治16年広告)

明治18年末、先生帰国。明治19年2月21日、中之島・西洋楼にて、キリスト教信徒有志の婦朝飲迎会に出席。

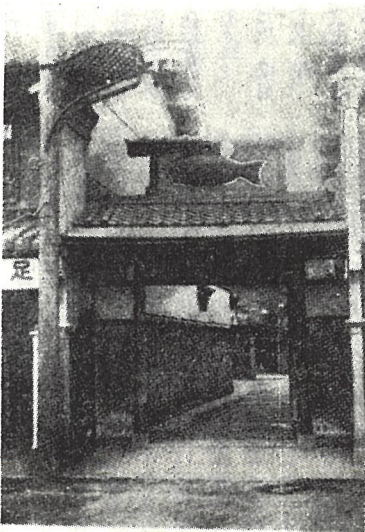
病願びやうがんの身を抛って、大学設立のため、先生懸命の募金運動各地に展開。

大阪はどうか。同志社をこの

地に創設せんとして失敗した先生は、やはり、芳しい募金の成果を挙げることができなかった。

その一因として、先生自身は、建野大阪府知事の非協力を指摘している。明治21年5月21日、中村栄助あての書簡中で、「今ノ如ク建野知事カ冷胆無鈍着デハ甚不都合」と記している。

建野郷三。旧小倉藩士。博識多才、その名は江湖に知られていたが、廃藩の後は野にあって風月を友としていた。明治10年、政府に召されて出仕、明治13年5月、渡辺昇に代って知事となる。大阪の経済再建のために多大



静観楼 (特色ある入口)

の努力を尽したが、反面、教育には熱意少なく、大阪が学術都市としての性格を失ったのも、彼のため、といわれている。

明治22年春。募金運動にも春が来た。広瀬宰平を通して、住友から三千円の寄付があった。大阪控訴院長・児島惟謙、第四師団長・高島柄之助の協力を得た。これらは2月のことである。児島のことは群書に精しいが、明治5年大阪築港事件以来の反長州派。高島は薩州藩の出身である。だから、やはり反長州派。山県軍閥と戦い、のち拓殖大臣として、伊藤（当然、長州）内閣を倒したこともある。

そして、3月16日、西村捨三、建野を継いで大阪府知事となる。情熱の人で、教育にも



建野郷三（長官銘々伝より）

熱意あり、先生のよき協力者となった。

西村は旧彦根藩士。土木畑の道を行んできた。土木局長時代に木曽川宝暦治水記念碑をつくり、大阪府知事として四条巖神社や木村重成碑を建設した感激家。また、知事在任期間わずか2年余であるが、勝山農学校等教育設備の充実に努力を惜しまなかった。

こうした児島・高島・西村を中心に、7月24日、灘萬に大阪官界の要人が集まり、挙って大学設立運動に賛助を約した。それで、ひとまず、後顧の憂いを断つた先生は、関東方面の運動のため10月東上、遂に不帰の客となった。

灘萬は、のち今橋に移ったが、当時は北浜・難波橋のたもとにあり、スッポン料理が珍らしく、大臣・高官連の宴会場であった。（今橋に現存）

先生、大阪における大学設立運動も終り、高級料亭・旅館散歩も、中央公会堂から梅田・常安橋・北浜と中之島を一廻りしたので、このへんで筆をおくこととしよう。

付記 函館脱出前の先生と大阪

先生が、はじめて大阪にその足跡を印したのは、文久2年11月28日のことである。文久2年といえば、函館脱出の前々年であり、青年七五三太の時代である。先生は、備中松山・板倉（安中・板倉の宗家）藩が横浜で購入した汽艦快風丸の玉島港（松山領）への航海に便乗し、その途中、大阪に立寄ったのである。大阪上陸の様子は、父民治あての書簡（文久2年12月5日付）によると、

「…河口辺迄参り早速端舟に乗換安治川を上り其より大河へ入り荒新と申御用達之家に乗り候処最早日暮ニ御座候故諸々見物も致兼候得共只々御堂耳見物仕候……（中略）……虎屋の鰻頭も喰兼甚残惜し久ソんし候…」と書いている。

文中、河口は川口、大河は大川（ただし、現在なら、土佐堀川というべき部分）、荒新は松山藩の御用達で常安橋にあった。御堂は日暮からの見物だから、北御堂（津村別院）であらうか。虎屋…は名物虎屋の鰻頭である。

（香里中高教諭・社会）